

尾崎士郎記念館企画展

「士郎と郷土三河」 特集

平成23年1月25日～平成23年7月31日



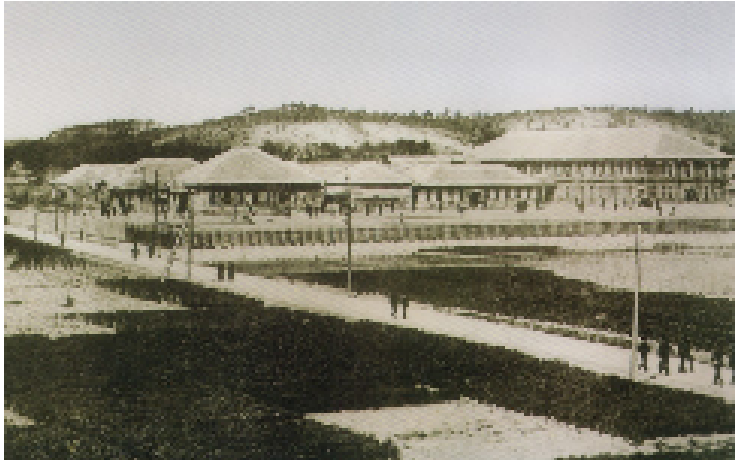
蒲郡竹島海岸を散策する士郎
雑誌『小説新潮』の特集記事取材旅行にて 昭和33年

■ 開催にあたって

尾崎士郎は明治31年2月に幡豆郡横須賀村で生まれ、地元の横須賀小学校を卒業した後、岡崎の愛知県立第二中学校（現岡崎高校）に進学した。当時の二中は、西三河で唯一の中学校で、三河全域から優秀な生徒が集まっており、多感な10代の6年間に岡崎で過ごした士郎には、三河男児としての郷土意識が育まれた。

また、士郎の実家は、父より郵便局長を継いだ長兄の重郎が公金横領の末、ピストル自殺を図ったことにより破産、家族は自宅を手放して東京に移ることになった。故郷の生家を失った士郎は、昭和22年に帰郷を果たすまで、実に30年近く故郷を訪ねることができなかった。

18歳で東京に移った士郎は、三河出身者に対し特別な親しみを感じ、温かく接した。今回の企画展では、岡崎の中学校時代や、その後の三河出身者との関わりを取り上げ、士郎の故郷に対する想いを紹介する。



県立第二中学校 『岡崎高校100年誌』より
士郎が在学した戸崎校舎。大正14年に現明大寺町に移転。



校内弁論大会で発表する士郎
ドモリに劣等感をもっていた士郎は、早朝に菅生川川原で弁論の練習をしてドモリを克服した。

■ 岡崎 「二中」時代の士郎

士郎は中学校へ岡崎に下宿して通学していたが、明治44年に西尾-岡崎間に軽便鉄道が開通したため、横須賀村の自宅を朝4時に発って徒歩で西尾に出て、電車で通学した。

中学時代から社会科学関係の書籍を入手して読みふけり、社会主義思想の専門知識を得ていた。当時は政治少年で、雑誌『世界の日本』に掲載された士郎の論文「いかにして選挙権を拡張すべき乎」が評者の早稲田大学永井

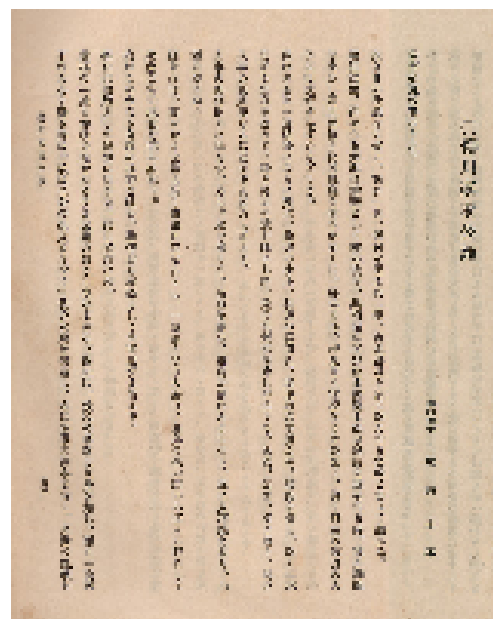


旧「二中」講堂 岡崎市教育委員会提供
日清紡績針崎工場内に移築されていたが、工場の撤退に伴って、現在は岡崎市が保存管理をしている。

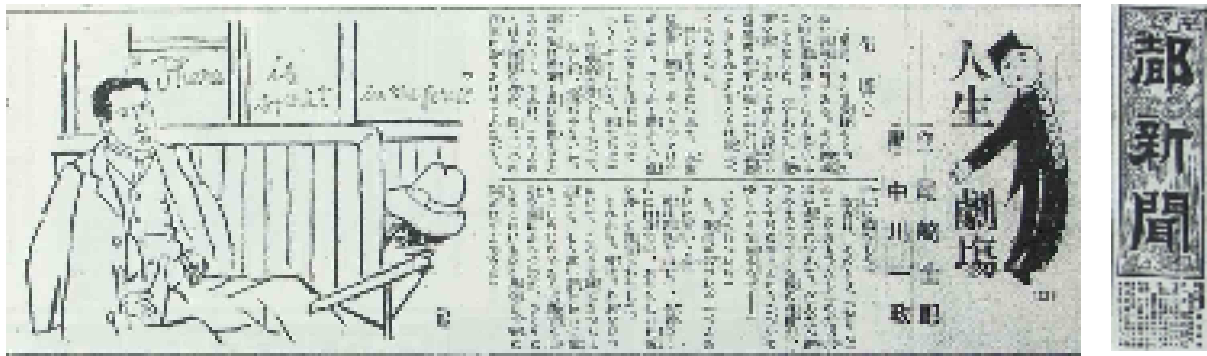
柳太郎教授の目にとまって親交を得て、教授の薦めにより早稲田大学進学を志すようになった。弁論大会での活躍や東京の雑誌への投稿・掲載など、士郎は校内でも一目置かれる生徒であった。なお、2年進級時に数学と体操の点数不足で留年したため、6年間中学校に在籍した。



「二中」同級生と岡崎公園にて 昭和30年
『小説新潮』特集記事取材旅行。中央:士郎、左:画家山本楸太郎



『両公記念号』(一部) 大正4年 二中学友会発行
岡崎ゆかりの家康・本多忠勝両公の文集。士郎は漢文調で独自の家康論を展開した。



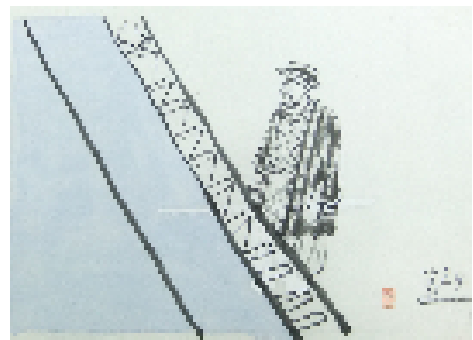
「都新聞」に連載された『人生劇場 青春篇』

士郎と挿絵中川一政のコンビで、昭和8年3月18日～8月30日まで計165回連載された。

■ 『人生劇場 青春篇』に描かれた「二中」時代

『人生劇場 青春篇』はフィクションであるが、士郎の中学時代の実体験に題材を得ている。「赤馬先生」のモデル繁野教諭は、詩人で『ミルトン失楽園物語』の翻訳を手がけた文学者であった。士郎は繁野の家を訪ねるなど親密な交流があり、士郎に文学の世界に接する機会を与えた。

小説で取り上げられた「同盟休校」は生徒によるストライキで、当時の二中では頻発していた。また、小説に描かれたとおり、士郎の下宿は現在の明代橋西の菅生川沿いにあり、窓からは殿橋を渡る鉄道馬車を望むことができた。



『人生劇場』初版本 中川一政筆箱原画

上：瓢吉らの問題行動で学校に呼び出された瓢太郎ら父兄。

下：呼び出しの後、瓢吉の下宿に寄る瓢太郎

さ さ き み つ ぞ う 佐々木味津三

明治29年、北設楽郡旧津具村（現設楽町）出身。県立第一中学校（現旭丘高校）を経て明治大学に進学。若くして文壇の評価を受け、大正12年に菊池寛主宰の雑誌「文藝春秋」の創刊の際、編集同人のひとりとなる。大正15年長兄の死去により、弟・姪らの養育費捻出のため大衆文学に転向。『旗本退屈男』『右門捕物帖』などの作品が相次いで映画化され人気を博す。昭和9年37歳で惜しまれながら他界した。



佐々木味津三肖像写真
『甘棠集』より



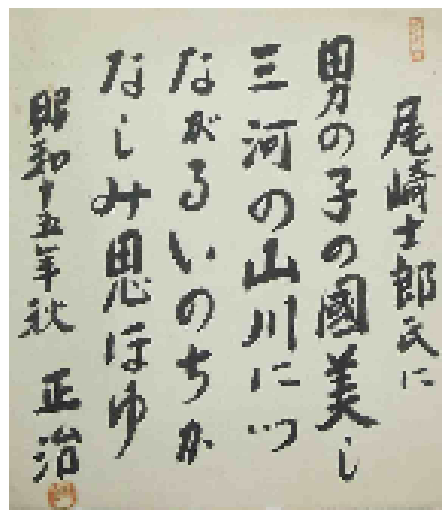
尾崎士郎著 『獄中より』

文藝春秋の同人であった味津三の推薦によって、「文藝春秋叢書」として出版された士郎短編集。

かげやままさはる
影山正治

明治43年、豊橋市出身の歌人・思想家。県立豊橋中学校（現時習館高校）を経て国学院大学に進学。在学中に反共、民族主義の日本学生連合を結成。昭和14年大東塾を結成。

昭和16年雑誌『ひむがし』創刊、21年後継誌として『不二』を創刊。獄中に差し入れられた『人生劇場』を読み、感銘を受け「終生『心の書』」とする。昭和14年に士郎と出会い、昭和22年の士郎30年ぶりの帰郷を薦めたのが影山で、吉良に同行している。



展示品リスト

No.	資料名	年代	種別	備考
1	弁論大会で熱弁をふるう士郎	大正4年	写真	『書簡筆滴』より
2	愛知県立第二中学校 戸崎校舎	明治末期	写真	『岡崎高校100年誌』より
3	旧「二中」講堂	平成22年撮影	写真	岡崎市教育委員会提供
4	西尾鉄道岡崎線 矢作古川鉄橋	明治44年	写真	『ふるさとの思い出写真集西尾』より
5	「人生劇場」碑	昭和61年建立	写真	『岡崎高校100年誌』より
6	「二中」同級生杉山鍬太郎らと岡崎公園にて	昭和30年	写真	『小説新潮』取材
7	『両公記念号』士郎「徳川家康公論」	大正4年発行	書籍	二中学友会発行
8	士郎直筆絵「中学生崩れ」	「明治43年頃の中学生」	士郎筆絵	
9	『小説新潮』士郎「作家故郷へ行く」	昭和30年8月号	士郎作品掲載誌	
10	直筆原稿「岡崎から吉良まで」	昭和30年8月号	直筆原稿	『小説新潮』掲載原稿
11	『暮しの手帖』士郎「おもいで町 岡崎」	昭和32年9月号	士郎作品掲載誌	写真解説を士郎執筆
12	『人生劇場 青春篇』初版本	昭和10年3月発行	士郎単行本	竹村書房発行
13	『人生劇場 青春篇』（普及版）	昭和10年7月発行	士郎単行本	竹村書房発行
14	『人生劇場青春篇』第18回 挿絵原画	昭和8年4月5日刊	中川直筆原画	都新聞連載
15	『人生劇場青春篇』第20回 挿絵原画	昭和8年4月7日刊	中川直筆原画	都新聞連載
16	『人生劇場青春篇』第22回 挿絵原画	昭和8年4月9日刊	中川直筆原画	都新聞連載
17	『人生劇場青春篇』第25回 挿絵原画	昭和8年4月12日刊	中川直筆原画	都新聞連載
18	『人生劇場青春篇』第31回 挿絵原画	昭和8年4月18日刊	中川直筆原画	都新聞連載
19	『人生劇場青春篇』第33回 挿絵原画	昭和8年4月20日刊	中川直筆原画	都新聞連載
20	都新聞『人生劇場青春篇』第18回掲載紙	昭和8年4月26日刊	新聞複写	都新聞連載
21	都新聞『人生劇場青春篇』第25・33回	昭和8年4月12・20日刊	新聞複写	都新聞連載
22	蒲郡竹島海岸を散策する士郎	昭和33年	写真	『小説新潮』取材
23	恋路ヶ浜を散策する士郎	昭和33年	写真	『小説新潮』取材
24	『小説新潮』士郎「月のさやかなる夜」	昭和33年8月号	士郎作品掲載誌	
25	佐々木味津三肖像写真	昭和7年	写真	追悼集『甘棠集』より
26	『甘棠集』士郎「佐々木味津三追悼文」	昭和10年3月刊	書籍	味津三追悼集
27	尾崎士郎著『獄中より』 春陽堂刊	大正13年	士郎単行本	味津三の推薦により出版
28	士郎愛用の文机	昭和初期	写真	大田区尾崎士郎記念館蔵
29	影山正治色紙	昭和15年	色紙	
30	尾関 栄「断片・尾崎さんのこと」	昭和40年刊	原稿	『瓢々録』原稿
31	清川 豊「遺影に寄せて」	昭和40年刊	原稿	『瓢々録』原稿